



TITLE:

<批評・紹介> アンダーソン著 松崎
壽和譯「黄土地帯」

AUTHOR(S):

眞島, 行雄

CITATION:

眞島, 行雄. <批評・紹介> アンダーソン著 松崎壽和譯「黄土地帯」. 東
洋史研究 1943, 8(3): 197-198

ISSUE DATE:

1943-08-25

URL:

<https://doi.org/10.14989/138857>

RIGHT:

黃土地帶

アンダーソン著
松崎壽和譯

昭和十七年十二月三日 座右寶刊行會刊

A5判四六〇頁・圖版三七地圖一・表一

挿圖一五六・定價金六圓參拾錢

本書は先史支那に關するアンダーソン博士の古典的名著
“Children of the Yellow Earth”の全譯本である。

本書の内容構成はアンダーソンが先史支那に關する自己の諸
論稿を調査年次に據る事なく研究對象の新舊を追うて整理し系
統づけて平易に叙述したもので、調査研究に當つての経緯や
種々の挿話をも併記してあり、一面間口の廣い彼の學問的經歷

の自叙傳とも謂ふ事が出來よう。彼は最初地質學者であり、礦
物資源調査の目的を以て支那大陸へ解剖のメスを振つたのであ
る、はしくも「支那の山層に於て、最古の有機物の化石、ス
トロマトリイテ鏤を探り當てた。」(一、原微生物の痕跡)こと
から、此の地の太古の氣候が溫暖で植物が豊富に繁茂し、(二、
地質時代の濕地性植物)中生代・新生代を通じて原生動物が棲
息跋扈して居た事を化石や遺骨等から推考して復原し、(三、
山東發見の恐龍と最古の哺乳動物・五、龍と龍骨)併せて其の
間に於ける地殼の變動を推論して居る。(四、山の生成)以上
の五編は謂はゞ支那先史文化の苗床としての自然的環境に就て
の叙述である。

次でその舞臺への人類の登場、即ち「北京人類」發見の経緯
に就いての詳細な報告が爲されて居る(六、北京人類)。とこ
ろがその後この地方から人類が長くあとを絶つてしまひ、後に
新石器時代末期に屬する人類が登場するまでは、舊石器時代の
人類は纔かに蒙古沙漠の沿邊に於てその遺跡が見出されるに過
ぎない。(八、鄂爾多斯沙漠の最新生人類)。それは、此の間に
この地方を襲つた氣候的變化が未開人の棲息を極度に脅かした
と思惟せられる「黃土堆積期」を北支那一帯に齎したが爲めで
あつたやうである。(七、黃土地帶)。然しやがて再び此の地方
を訪れた氣候的變化は黃土の堆積地を溫暖な可耕地たらしめ
(九、大地の容相)、此の地には再び徐々に人類の生活の營みが
繰り展げられていった。

が、それはもう新石器時代も最後期に屬する時分の事で、その遺跡・遺物は最初、河南省の仰韶村から見出され（一〇、仰韶住居址の發見）、次で沙鋪屯洞穴からも收得せられた（一一、食人種の聖壇）。此の再度の發掘から、アンダーソンは半月形乃至矩形の庖丁・不均齊な石斧・鼎形三脚器・鬲などの諸遺物を以て支那古代文化の象徴物と看做し得ると論じて居る（一二、古代の道具と器）。さて、其の後彼は仰韶村等で收得した彩色土器が南露トリポリエ土器と類似してゐる所から、これを直ちに支那文明西方起源説と結びつけて考へ、彩色土器も西方より齎されたものであらうと想定して、地理的に東西文化の接觸點と覺しき庫々諾爾湖畔を探つて見た。ところが、必ずしも彼の想定が當つて居たといふ譯ではないが、此の地方からも仰韶期住民の遺物就中彩色土器が見出された（一三、庫々諾爾の仰韶期住民）。そこで彼はその傳播徑路を辿るといふ目的の下に黃河上流蘭州以西の地方を跋渉したところ、隨所に仰韶期遺物、特に彩色土器を收得することが出来、彼の想定は實證的に裏づけられたやうな形となつた。恐らくこれに勢を得た爲と思はれるが、朱家寨住居址の發掘を契機として、彼は遂に考古學に専心身を挺するべく決意する（一四、狂人と羅漢堂遺跡・一五、朱家寨住居址の發見と考古學への轉換・一六、洮河流域・一七、河谷内の住居址と山上の墳墓）。さうして從來の收得遺物に考古學的乃至土俗學的考察を加へ（一八、原始社會に於ける呪術と葬喪儀禮・一九、子安貝の表象・二〇、半山墓の象徴

性）。最後に總括と將來への若干の見透しとを以て筆を結んで居る（二一、仰韶文明）。

以上が本書の内容の概略である。が、流暢で読みやすく而も正確な譯文、日本語になりきつて居る譯文は原書の眞面目を傳へて剩す所なく、且つ又、譯者松崎氏の極めて該博なる考古學的識見を以て加へられたる懇切詳細なる補註は、東亞考古學に占むる原書の古典的地位——アンダーソンは東亞考古學の開拓者として幾多の輝かしい業績を残したとは謂へ、其の後の東亞考古學の進展は極めて目ざましく、彼の業績も今日では先驅者としての榮譽を擔ふに止まるやうな傾きが段々と強くなりつつあるといふ事、そのやうな傾きを今假りに古典的と名付けるとするならば——を明確に理解せしむるばかりでなく、補註の妥當さは、補註自ら補つて譯本にして譯本に非ず、自ら史前支那に關する別個斬新の概説書たるの感を懷かしめられるものがある。

後刻仄聞するところによると譯者松崎氏はこの翻譯に實に八ヶ年の日子を費されたる由にて、宜なる哉の感を深めた。杜撰な際物的翻譯本の氾濫してゐる今日、松崎氏のこの總てに對する良心的態度は本書の出来榮えと共に高く評價せらるべきであらう。

〔眞島行雄〕